

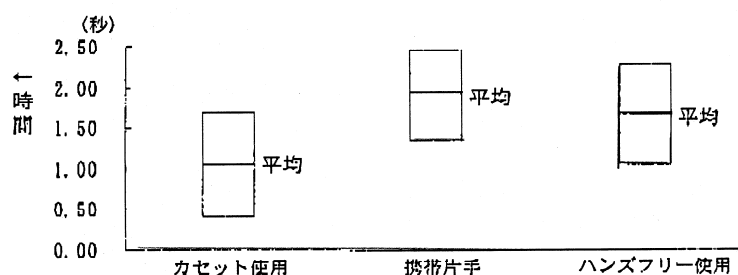
携帯電話の使用が運転行動に及ぼす影響に関する調査研究（平成9年度）

自動車運転中の携帯電話使用に起因した交通事故の増加が、新たな問題となっており、通信時の事故が全体の16%も占めている。そこで、携帯電話機の操作及び携帯電話による会話が運転行動に及ぼす影響に着目して、その問題点を明らかにすることによって、今後の同種事故の発生防止に役立てることを目的として、実走行実験等を行った。

① 着電操作時の視線移動時間

間を調べた結果、着信音が鳴り、助手席にある携帯電話を取り上げ、通話状態にして視線が元の前方位置に戻るまでの間、視線の移動時間の平均は1.90秒であった。同じ状況でハンズフリーの場合は1.66

図 機器に対する区間あたりの移動時間



秒、比較のために行ったカセット挿入作業は1.05秒であった（図）。

② 加算問題処理中の反応時間を運転モード別に比較すると、短いものから順に、通常運転（0.937秒）＜ニュースを聴きながらの運転（0.955秒）＜ハンズフリー使用運転（0.993秒）＜携帯片手運転（1.038秒）となった。反応時間計測時の車速と車間距離データをみると、車速は速いものから順に、通常運転＞ニュースを聴きながらの運転＞ハンズフリー使用運転＞携帯片手運転と遅くなり、車間距離は、短いものから順に、ハンズフリー使用運転＜通常運転＜ニュースを聴きながらの運転＜携帯片手運転となった。

③ 各運転モード毎の被験者が正面以外に視線を移動していた合計時間の平均を比較すると、長いものから順に、通常運転（37.7秒）＞ハンズフリー使用運転（33.9秒）＞ニュースを聴きながらの運転（33.4秒）＞携帯片手運転（32.6秒）となった。また、運転モード毎の各被験者の視線移動回数の平均では、多いものから順に、通常運転（45.0回）＞ニュースを聴きながらの運転（39.4回）＞ハンズフリー使用運転（38.9回）＞携帯片手運転（38.2回）となった。

④ 走行中、車体を進行方向に向けて真直ぐ維持する進路保持性を調べた結果、ハンドルの振れ面積の値は、小さいものから順に、通常運転＜ハンズフリー運転＜ニュースを聴きながらの運転＜携帯片手運転となり、特に携帯片手運転で突出していた。

⑤ 今回の一連の実験から、着電・架電時の脇見運転を防止するには、ハンズフリーキットの使用が有効であることが確かめられた。今後、ハンズフリーの安全性を高めるために、機器の機能、設置場所、使用方法等、人間工学的な研究開発が望まれる。しかし、通常の携帯電話、ハンズフリーキット等、使用形態が異なっても、携帯電話が人の情報処理に負の影響を及ぼしていることに変わりはなく、運転中の携帯電話の使用が運転行動に及ぼす影響を具体的に広く広報して、運転者の認識を高めることが必要であると考えられる。